

第三十八章 教会・祈りと感謝との礼拝

「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」
(ヨハネ 4：24) 今の時代においては礼拝は形式や環境に左右される問題ではなく、キリストの御名によって捧げられるクリスチャンの心からの神への崇敬なのである。そして、祈りと賛美は礼拝の主要素であり、人が神と直接に交わる行為である。

I キリストの降誕以前の祈り

どの時代においても敬虔な人々によって、個別の祈りは捧げられていたものの、祈りがおもに家長によって家族のために捧げられていたのは明らかである(ヨブ 1：5)。また、モーセからキリストまでの時代には、民のために祭司や統治者たちが祈りを捧げていた。これらの時代の祈りの根拠は、エホバなる神の契約と(I列王 8：22-26、ネヘ 9：32、ダニ 9：4)、神の聖なるご性格(創世 18：25、出エジ 32：11-14)に訴えることであり、いけにえの血を流してから祈りが捧げられた。(ヘブ 9：7)

II 御国を期待しての祈り

マタイ 6：9-13の「主の祈り」は「御国が来ますように」という訴願を含んでいる。これはキリストが統治される地上王国が実現することを第一義的に考えている。今の時代に御国の到来を祈ることは決して不適當ではない。しかし、この御国とはキリスト再臨以前に、人間的な努力によってもたらされることはなく、ご自身の圧倒的な御力によって地上に王国を建てられるキリストの、栄光の再臨を待っていることははっきりと理解されるべきである。

III キリストの祈り

ヨハネ 17章には真の「主の祈り」が示されており、御父と御子の間の最高に自由な交わりを示している。この事でキリストは大祭司としての職務を執行しておられ、キリストの祈りの主題はペンテコステの後に来る時代における地上の信者たちの必要である。キリストは地上生涯の間、長い時間を祈りに費やされた(マタ 14：23、ルカ 6：12)。

それは父なる神との親しい交わりであった。キリストの祈りは約束や契約に基づいていたのではなく、ご自身の人格と祭司としての務めに基づいているように思われる。キリストの祈りは現在の聖約期の間中続くところの、父なる神の右の座におけるとりなしを表している。

IV 恵みの関係のもとにおける祈り

ヨハネ 14：12-14、15：7、16：23-24の箇所において、恵みのもとにおける信者の祈りについての教えがなされている。キリストのおことばに従って現在の恵みのもとでの祈りの可能性は、地上的な制約から新しい創造において得られる無限の関係の領域へと引き上げられる。この祈りの形式については4つの面から考察できよう。

- 1 祈りの機能は賛美だけではなく、信者が自分自身の必要を主イエスに訴え、また、他の人々のためにとりなすことをも含む。(ヨハネ 14：13-14)

- 2 主イエス・キリストの御名によって祈る特権は、恵みのもとにあってすべての神の子たちに及んでいる。(ヨハネ 16：23-24)
- 3 恵みのもとでの祈りの範囲は「何事でも」という一言で述べられているが、しかし、当然の制限がないわけではない。キリストの目的と栄光にかなって、キリストの御名によって、「何事でも」求めることである。真の祈りが捧げられるためには、心がキリストに合わせられていなければならない。(ヨハネ 15：7)
- 4 祈りの実践においては注意が払われるべきである。規則的な祈りの時をもつことは大切である。しかし、不敬度な祈りの用い方や、無意味な繰り返しは避けなければならない。また、祈りは神からの秩序に従うべきである。(ヨハネ 16：23、ユダ 20)

V 感謝の祈り

真の感謝とは、受けた恩恵に対する心からの謝意が自発的に表現されたものである。祈りにおける感謝は旧約聖書の時代からキリスト、パウロの模範に至るまで聖書に記されている。(詩篇 92：1、マタイ 15：36、使徒 27：35)

- 1 感謝は絶えざる祈りでなければならない (ヘブ 13：15、参照エペ 1：16、5：20、コロ 1：3、4：2、詩篇 30：12、79：13 他)
- 2 すべてのことに感謝しなければならない (エペ 5：20、I テサ 5：18、参照ピリ 4：6、コロ 2：7、3：17)